

大井九条の会 平和の集い

平和への思いを語る会

朗読劇

「If I must die ガザからのメッセージ」 ～絶望の中で語る希望の物語～

原作 リファト・アルアライールほか 構成 田村嘉浩

「If I must die」という詩があります。ガザの詩人・英文学者のリファト・アルアライールさんが、自分の死を予感して書き残した詩です。2023年12月6日、イスラエル軍のミサイル攻撃によって殺害された後、この詩は「物語を語ることが抵抗の手段」という彼の信念とともに、ガザの停戦を願う人々の支えとなり、70以上の言語に翻訳されています。

朗読劇「If I must die ガザからのメッセージ」は、1948年のイスラエル建国以来、イスラエル軍によるジェノサイド（大量殺戮）によって多くの人が殺され苦しんできた、ガザ内外のパレスチナ人の手記や日記、詩などを、朗読のための台本としてまとめたものです。

今回の「平和の集い」では、ガザを通して戦争の実相と平和実現の道を考えたいと思います。多くの方のご参加をお待ちしています。



リファト・アルアライール

1979年、ガザに生まれる。パレスチナを代表する詩人・英文学者。ガザ・イスラーム大学で世界文学と文芸創作を教え、若い世代の抵抗手段として、執筆の力を醸成することに尽力した。「We Are Not Numbers」（私たちは数字じゃない）プロジェクトを共同設立。編著に『物語ることの反撃』『ガザの光』がある。2023年、イスラエル軍によって殺害された。

I部 朗読劇「If I must die ガザからのメッセージ」

II部 平和への思いを語る（参加者のみなさん）

日時：2026年8月22日（土）14:00～16:00

場所：大井町生涯学習センター2階 第1～2会議室

参加費：500円（高校生以下無料）

主催 大井九条の会

連絡先 0465-83-5875 田村 0465-83-2358 二上

「夢と生きる力を育む物語」

パレスチナ人の生と死が数字に還元されることに抗議し、人間一人ひとりの物語として語られなければならないと提唱した人がいた。

「We Are Not Numbers」(私たちは数字ではない)という組織を立ち上げたパレスチナの英文学者、リファト・アルアライールさんだ。

彼は自らの死を予感しつつ、未来を語る言葉を刻み続けた。〈わたしの死を／希望をもたらすものにしてくれ／わたしの死を 物語にしてくれ〉(西山正一訳「If I must die」より)。リファトさんは、2023年、イスラエル軍の空爆で殺害された。44歳で、6人の子どもを遺して。今もなお続く戦乱下のガザでは、うつ病が広がり、自殺願望の若者が増えているという。けれども、リファトさんの言葉は人々の中に、なお生きている。



ガザの高校生ロアさんのことを思った。NHK国際放送「やさしい日本語」アラビア版で学び、日本語を流暢に話せるようになった。彼女の夢は日本への留学、通訳者になること、北海道の雪を見ることだという。

「物語が私たちを作るのです」と書き遺したリファトさん。ロアさんは彼の意志を受け継ぎ、自分の物語を紡ぎ続けている。戦争のニュースが続くが、そんな時こそ、夢と生きる力を育む物語が求められている。

(しんぶん赤旗のコラム「朝の風」2026/2/1より)

もし私が死ななければならないのなら

もし私が死ななければならないのなら

あなたは生きなければならぬ

私の物語を伝えるために

私の遺品を売り

布切れと

少しの糸を買うために

(長い尻尾のついた白い物しておくれ)

ガザのどこかにいる子どもが

天を仰ぎ見て

炎に包まれ旅立つた父を待つとき――

その父は誰にも別れを告げられなかった

自らの肉体にすら

自分自身にすら――

あなたが作る 私の風が

舞い上がるのを子どもが見て

ほんのひととき 天使がそこにいて

愛をまた届けに来てくれたと思えるように

もし私が死ななければならないのなら

それが希望をもたらしますように

それが物語となりますように

ガザのジェノサイドは時の経過とともに、その破壊の規模を累乗的に拡大させ、「ホロコースト」と呼んでも過言ではないと思われたそれは、いつしかそれさえも凌駕するものとなり、単なる身体的・生物学的破壊(ジェノサイド)にとどまらないホロサイド(全的破壊)、メタサイドへと至ってしまいました。そして、停戦になった今も、停戦によって不可視化されたガザで、ジェノサイドは続いています。ガザのジェノサイドとは、一過性の「出来事」ではなく、入植者植民地主義によるイスラエルのパレスチナ占領が維持される限り続く、永続的な構造的暴力なのです。

「停戦」によって、ガザに関する主流メディアの報道も減少し、市民の関心も雲散霧消しつつあるかに見える今だからこそ、ガザのホロサイドをもたらしたものの歴史的背景と暴力の根源を私たちがしっかりと認識する必要性が、これまでも増して高まっていると思います。

(岡 真理『増補版 ガザとは何か』(だいわ文庫)「文庫版はじめに」より)

